

曙光

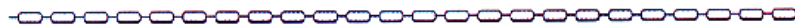


(しょうこう)

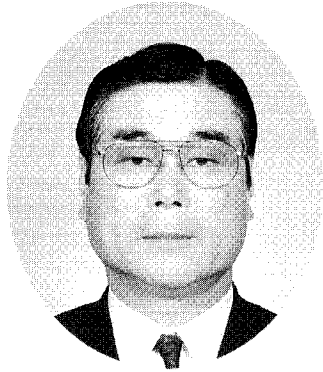
1999.10.1
東北大学大学教育研究センター広報 No.8



臨海実習の授業風景



- ◎ 国際化の波と日本 副総長 仁田新一……2
- ◎ 学生による授業評価アンケートの実施について
大学教育研究センター長 星宮望……4
- ◎ 学生からの投稿
 - 教育学部3年生 小澤周平……5
 - 理学部4年生 松崎龍……6
 - 薬学部3年生 加川夏子……7
- ◎ 主な行事予定……8



国際化の波と日本

副総長（学務等担当） 仁 田 新 一

近年の通信技術、交通手段の急速な進歩は世界の姿を大きく変えつつある。e-mailは24時間働き続けていて送受信が可能であるし、翌日の急用に前日に外国へ飛び出す時代になっており、或る意味では少し前の国内通信と旅行よりも便利にさえなってきた。また、地震などの天災、大事故などへの緊急事態に対する人道的な行為などはもとより、世界経済・文化・科学技術への貢献など、グローバルな立場で日本が果たすべき役割を求められる事も出てきていることも事実である。これら国際化の波にこれから日本人としてどのように対処して行くのかまた行くべきなのかを大学人として考えてみたい。

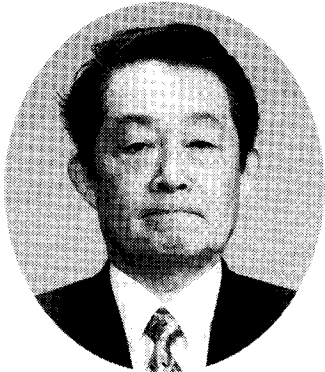
日本は小さな島国であることから、古来他国との接触の機会が少なく、一時は鎖国制を敷き諸外国との交通を一切禁止した時期があった。この間、日本古来の文化が純粹培養され、とてもすばらしい独自の文化が誕生し、今でも少しずつ変化はしているものの世界に誇り得る美しい文化が残っており、他国の羨望的となっている。

一方、ヨーロッパの国々を訪れると、もう既に国境は無いに等しいし、統一通貨さえも現実のものとなっている。言語も日本人の目から見れば、まず字体が同じであり、単語も少し変化はしているものの共通語がかなり多く、お互いに覚え易くそれ程努力しなくとも数カ国語を自由に話せる友人を数多く知っている。現在のヨーロッパもかつては互いに侵略したりされたりすることによって頻繁に人々が交流(?)し、その都度他国の文化、技術を受け入れたが、それぞれの固有の文化の一部は死守し、現在に受けつがれている。それらを彼らはとても大切にしているのが、現地を訪れると痛いほど良くわかる。特にうらやましいのは美しい街並みである。歴史的な建造物は内部はめまぐるしく変わることはあっても、外見は大切に保存し、そのための規制が驚くほど厳しいと聞く。このように彼らは近隣諸国との交流を数多く経験しながらも、独自の文化を底流に持ち、上手に交際する術を体得してきた。

私は国際学会の運営にはほぼ10年近く関与しているが、外国人、とくに欧州代表のその巧みな“かけひき”にはいつも翻弄されっ放しである。彼等にすれば当然の事なのであろうが、交渉事のあまり上手でない“島国育ちの悲しさ”である。しかし、少しずつこれらを学習することにより、彼等の実体を理解する側にまわると、とたんに交渉が楽になるから不思議である。日本人の感覚と手法で事を運

ぼうとするから軋轢を生じるのであって、その時は外国人の身になってみれば良いのである。即ち価値観を自分の方から相手にできる限り近づけてみる事である。こんな簡単な事を悟るのに何年かかった事であろうか。

国際化という大きな波が日本をまさに翻弄しようとしている時に日本人としてどう対処すべきなのか、またいずれ社会に出て国際競争に直面する学生教育はどうあるべきなのか、諸々の考え方があろうが、外国人を知る・異文化を身をもって知る事がまず基本であろうと考える。それにはできれば外国に長期間滞在し、風土・文化に直接接触ることができれば最高である。しかしそれを全員に求めるのは無理であり、現実的には多様な国々からの留学生をもっと増やして、日本の学生と教官との接触の機会を数多く持たせて、それぞれの国の文化・考え方・特徴などへの理解を深め、さらには居住空間を伴いでできる施設が必要となる。このように出来る限り外国人との交流をはかることにより、日本が外国から何を期待され、何をなすべきか、また何が出来るのかを身を持って感じられれば、外国との競争と協調がどのようになされるべきかが自ずと明確になって、今後の国際化の波に、充分能力を発揮して対処できる頼もしい次世代を誕生させることができるのであろう。東北大学がその発信の源とならん事を大いに期待するものである。



学生による授業評価 アンケートの実施について

大学教育研究センター長 星 宮 望

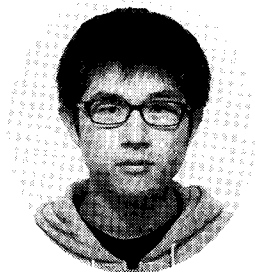
平成11年1月に、東北大学として初めて全学教育（平成10年度、2・4セメスター）についての学生による授業評価アンケートを実施しました。これまで、工学部や理学部などで個々に実施してきておりましたが、東北大学の全部の学部（10学部）と全学教育とについて一斉に実施することとしたものです。これは、今後の授業実施方法の改善を主な目標として、大学の自己評価の一環として実施したものです。今後、より良い授業を提供することにつながることを期待できるものと考えて、学生諸君全員の理解と協力をお願いした次第です。対象となったクラスは延べ631クラスで、履修学生数は延べ43,690名でした。この内で授業評価アンケートを実施したのは476クラスで、履修した学生数31,913名中、アンケート回収数は22,270でした。したがって、アンケートの実施率はクラスの75.3%、回収率は69.8%でした。多数の学外の非常勤講師の先生方への説明や連絡が必ずしも十分ではなかったこと、初めての試みであったことを考えれば、この実施率と回収率は予期以上の数字であり、ご協力下さった教官諸氏ならびに学生諸君に御礼申し上げたい。

この集計結果は、各学部の集計結果と併せて今秋には学生諸君にも公開されるので、ここでは、アンケートの「自由記述欄」に多くの学生諸君が記述していた疑問や注文に対して簡単に回答したい。

- ① 回答いただいたアンケート用紙は、コンピュータによる集計がすんだ後、個々の授業担当教官へ送付し、今後の授業の改善に使うよう依頼済みである。
- ② 教室の環境などについての多くの不満や指摘があった。すぐに全てについて対応することは、困難であるが、できることを今年度中に実施することとした。例えば、教室内の照明の改善、教室などの「美化向上」への具体策などを実施することとし手配している。
- ③ 時間割編成や履修の不便さなどについては、教室の制約などのためすぐに対応できないものが多いが、極力改善するように全学教育教務委員会へ大学教育研究センター長から依頼した。

東北大学は、今後とも「研究大学」としての特色を鮮明にする方向で一段と大学改革を進めることと思われるが、その足・腰を支えるものは「教育」であって、その基本は教官と学生とで作り上げてゆく「授業」にあると思われる。その意味で、今後も学生による授業評価の重要性は少なくなることはないであろう。これに関する学生諸君からの意見を今後とも拝聴したい。

学生からの投稿



全学教育への思い

—二つの提案—

教育学部3年 小澤 周平

この紙上では、自分の体験を元に、率直な意見を交えながら、自分なりに二つの提案を試みたいと思う。

まず一つ目は、語学について。いわゆる第一外国語として必修科目に設定されている、「英語」を、1・2年次には履修しなければならない。この高まる国際社会のニーズに応えるべく、または、これから21世紀という時代を生きていく人間としての素養をより充実させよう、という類の趣旨が、おそらくその根本にあって、こう設定がなされているのであろうかと推測され得る。そこで、語学力の必要性に関しては、事実、僕個人として、痛感していることの一つでもある。

ところが、現状はどうだろう。1年次では、開講される授業の選択権すらなかった。そのかわり、それぞれは、ただ単に学籍番号順に特定のクラスに割り振られ、その上、余程の事情がなければ、その例外を実行するのは難しい。といったシステムであったように記憶している。このシステムの背後には、もちろんきちんとした考えがあって、そうなされていることだと思う。むしろ、そうであって欲しいし、そうでなければならぬだろうとも感じる。そうは認めたと上でも、そのこと自体は、果たして本当に有効な方法と心得るのだろうか、その疑問は依然として残る。

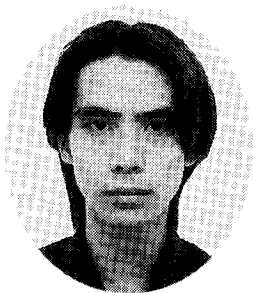
少なくとも、一学生としての立場から言うと、できる限り多くのクラス履修にあたって、ぜひ

とも、各学生それぞれが、授業内容を吟味しながらその個人的意思決定をし、それに基づき、かつ、それが最大限尊重される形での選択、その必要性を感じると共に、事態の改善を提案したい。

次に、履修方法について。きっと、この点については僕個人に限らずとも、他にも同様な意見を抱いたことのある人が、少なからずいるだろうと思われる。つまり、手続きの際に抱くある種の不便さに関しての点である。

まず、全学教育科目の履修にあたって、学生は、分厚い「全学教育科目に関するシラバス」を、公式にはほぼ唯一な資料として活用し、授業の詳細を知ろうと努めることになる。けれども中身は、簡条書きなどで型どおり示されていて、情報としての質は意外にもあっさりとしていることが、少なくはないのも事実だと思う。なので、そこに書かれていること以外にも、もっとつっこんだ細部を知りたいといった場合や、文面自体に疑問点を見出した際などは、その点を追及することはしがたく、よって不便さを来しかねない。

そこで、二つ目の提案が、それをパソコン上の手続きなどで代行できないだろうか、というものである。担当教官とのアクセスも、現状よりは容易にできるようになるのではないかと推測される。試験的にでも、一部分への採用だとしても、何らかの形で一度導入してみる価値はあるのではないかとと思われる。



全学教育科目について

理学部4年生 松 崎 龍

僕は4年生にもなって教養教育科目、いわゆる般教をまだとり終わっていない落ちこぼれなので、あまり偉そうなことは言えないのですが、僕の経験から全学教育科目の授業について、いくつか感じたことを書かせてもらいます。（あくまで個人的な見解ですが、他の学生の共感を得られる部分もあると思います。）

まず第一に教養教育科目ですが、今のシステムのままではあるだけ無駄だと思います。教養教育科目とは本来、個人個人が専門以外の興味ある授業をとり「専門バカ」になるのを防ぎ、大学生としての必要最低限の教養を身につけるためのものだと思うのですが、今のシステムでは専門や基礎教育科目の空いた時間にしかとれず、ほとんど選択肢もないまま、ただ卒業するためだけに興味のない科目をとらざるをえないというのが実状です。そのため授業に出ようという意欲もなくなり最初の1、2回は出席しても、あとはテストの日まで欠席というようなこともありました。このようにして単位を取得しても、結局得るものは何もありませんでした。今となっては何を習ったのかすら覚えていません。

次に基礎教育科目ですが、何と言っても実験がカリキュラム的に問題があったように思います。授業でまだ教わっていないことを知らなければ理解できないような実験をするにあたっ

て、なんの基礎知識も与えられずに何をしているのかも分からないまま、ただテキストに書いてあるとおりに実験をし、その後レポートを書かなければならないので必死でテキストを読み返して、やっと何をしていたのかおぼろげに分かるということの繰り返しでした。せめてもう少し基礎の理論から教えてくれる時間をとるか、もう少し物理について学んでからならば多少は理解できたと思います。

最後に教養教育科目の総合科目ですが、僕は青葉山キャンパスに通っているので講時外のこの授業をとりたいのですが、この授業をとるには履修カードを出して抽選に受からなければなりません。しかし、実際にはなかなかとれません。せっかく1年生と2年生以上で履修カードの色が違うのですから、少しは上級生を優先的に選んでくれてもいいのではないのでしょうか。

以上が僕の感じたことです。批判的なことしか書きませんでした。別に全学教育科目全般に関して不満だらけだった訳ではありません。ただ、上にあげたような部分が改善されれば、さらに学ぶ意欲がわき、有意義な学生生活を送れると思います。学生は皆学問に対するあこがれを持って入学してくるのですから、ぜひ先生方にこれらを検討していただき、今よりもさらに楽しく学べるような東北大学を作りあげてもらいたいです。



「全学教育へ期待すること」

薬学部3年生 加川 夏子

受講する科目に対して、その学生がどれ程の関心を抱いているかということは、その講義を面白いと感じられるかどうかの最大のポイントです。

私が全学教育科目を受講したのは、主に大学1年の頃で、新入生特有の初々しい緊張感と軽やかな興奮を持って、あの分厚いシラバスを手にしたことを覚えています。その頃は第二外国語という言葉や、大学生であることの代名詞の様に感じていたもので、開講時間の関係から、希望通りの中国語を受講できないと知った時には、いつまでも未練がましく大騒ぎしていたように思います。薬学部の学生は、半強制的にドイツ語かフランス語のどちらか一方を選ばせられる傾向があり、私は幸いにも、理解あるドイツ語の教官に恵まれ、ドイツ語への興味を喚起するという終始一貫した教育姿勢を打ち出して下さったおかげで、今ではドイツ語を履習した事に満足しています。しかし初めから、ドイツ語に興味がある者が受講しているという前提で扱われていたとしたら、そのような見方に対する反発心から、これ程ドイツ語に親しみを持つことができたかどうか疑わしいものです。

全学教育が、専門性に囚われない柔軟な思考力の養成を基本理念に掲げるならば、学生は本来、自分の関心に従った自由な選択をしたいものですが、実際には二者択一、あるいは一つに限定される場合もあります。その様な状況で、

初回の授業を曖昧な態度で臨む学生も結構いますが、彼らに対して十分な導入を行わずに、いきなり教官の得意分野を展開されては、学生は単に授業の傍観者となりかねません。こうなると、回を重ねる毎にその科目への好奇心は薄れ、授業に飽きて来るだけでなく、大学の授業とはこんな調子で進むものと、妙に納得させられるのです。これでは新入生の意欲を持続させるどころか、大袈裟に言えば失望させてしまいます。教官はその分野に長年通じた研究者であるのに対して、学生はおそらく、自分の専門以外の領域で系統的な講義を受けることのできる、最初で最後の機会です。教官はもっと専門家として、その学問の醍醐味を学生に伝え、関心をぐっと引きつける場を用意すべきで、それは特に初回の講義と、約15回にわたる授業に散りばめられ、後半に至るにつれて面白いと感じられるのが理想だと私は思います。私自身、大きな関心を寄せて選択した学問のはずが、仕舞には大したものではなかったと残念に思われた講義がありましたが、理由は、講義の間に意表を衝かれる機会が少なかった事と、今後独力でその学問と接触しようとした時、役立つと思われる手段を学び取れなかった事です。

全学教育の中でも特に教養教育科目では、受講者の意図は様々であり、学生の関心を過信することは、講義をつまらないものにするおそれがあると思います。

主 な 行 事 予 定

平成11年度全学教育科目授業等にかかる後期の日程は次のとおりです。

10月1日（金）～12月24日（金）	第2・4セメスター授業
10月14日（木）	履修カード提出期限
10月14日（木）	履修科目届提出期限
10月29日（金）～11月1日（月）	大学祭（10月29日、11月1日休講）
12月27日（月）～1月7日（金）	冬季休業
1月11日（火）～1月27日（木）	第2・4セメスター授業
1月14日（金）	大学入試センター試験実施に伴う休業
1月28日（金）～2月10日（木）	補講
2月14日（月）～	学期末休業

電話による休講案内について

本学では、学生サービスの一環として、現在行われている掲示板及びホームページによる休講のお知らせに加えて、電話で照会することにより、大学教育研究センターで行われている全学教育科目の授業を対象に、休講情報の電話案内サービスを暫定的に平成11年9月27日から開始しました。

電話による休講案内は、自動音声応答システムにより、休講情報が日時、講時別に電話で即時に得られるシステムです。利用の方法については、別途、お知らせしますが概略次のとおりです。

1. 電話番号は、022 217-5576（通話料は有料）です。
2. プッシュ回線又はトーン機能のある電話機からのみ利用可能となります。
3. 休講案内は、授業日前日の午後5時までには教官から届け出のあったものです。

学務部入試課教務情報システム開発室

発行 東北大学大学教育研究センター
Research Center for Higher Education,
Tohoku University

〒980-8576 仙台市青葉区川内

インターネットホームページアドレス <http://www.high-edu.tohoku.ac.jp/>